

# 郷土資料の散歩道

図書館郷土資料室

〒21-6111 内線6201

## 藁科家寄贈文書

藩医藁科家に伝わった文書群  
鷹山の師匠に  
平洲を推挙した藁科松伯

今回は市立米沢図書館の寄贈・寄託文書中の「藁科家寄贈文書」を紹介し  
ます。昭和十年および平成八年に藁科家から図書館へ寄贈していただいた文書群です。

藁科家は代々米沢藩医を勤めた家柄ですが、中でも上杉鷹山の素読師範となり、若き鷹山の教育に力を注いだ藁科松伯貞祐が有名です。また、松伯は江戸の町で出遭った細井平洲の講義

に心打たれ、門人となり、鷹山の師匠にと強く推薦しました。その結果、明和元年（一七六四）年より平洲先生の指導が始まります。時に鷹山十四歳、平洲三十七歳、松伯二十八歳でした。

## 鷹山が送った送別の詩

明和四年、鷹山が江戸で家督し第九代藩主となると松伯は鷹山の侍医となりますが、同六年に肺病が悪化し、帰国を余儀なくされます。鷹山・平洲等は松伯を見送る宴を開き、送別の詩を贈りました。

下図は鷹山が贈った「江松伯米沢に還るを送る」と題した漢詩（七言絶句）です。鷹山十九歳、すでに丸みの帯びた優しい書体で書かれています。

しかし、鷹山らの願いも叶わず、松伯は同年八月に米沢で三十三年という短い生涯を閉じました。

## 平洲の墓参と遺稿への序文

明和八年、平洲は米沢へ招かれ藩士や領民へ講義を行います。その間に善立寺（相生町）にある松伯の墓前に参り涙を流しました。また、遺族から「善我館遺稿」の序文をたのまれ、認めました。その序文では、松伯の推挙で鷹山の師となったことを感謝し、離別の際に米沢に来て学問を教えること



▲来章主人は鷹山の雅号の一つ。江戸藩邸の鷹山の居間を来章閣（らいしょうかく）と称し、送別の宴も来章閣で催された。最後に「藤治憲印」と「字曰民表（あざないわくみんぴょう）」の印を押す。

を頼まれた事や、死の直前までも鷹山の行く末を思い言葉を贈ったことに感慨した事を述べています。まさに松伯は、平洲を鷹山の師範に推挙し、平洲に藩校設立の協力を依頼した重要な役割を果たした人物です。

## 郷土資料の小径

新着郷土資料の紹介

### ◆◆『上越市史』通史編2 中世◆◆

上越地域の鎌倉時代から戦国時代までの歴史を、最新の研究成果を取り入れ記述。上杉謙信や景勝・兼続についても詳しく述べられ、お勧めの本です。

こうした鷹山・平洲の書や、鷹山を支えた家臣の書などを多く含む藁科家文書は、鷹山や平洲の研究にとって重要な資料となっています。



▶「善我館遺稿」平洲序文の部分

「善我館」は松伯の書齋名。米沢一の知識家であった松伯の書齋には、竹俣当綱・荻戸善政・木村文八などの俊才が集まり学問に切磋琢磨し、後に彼らが鷹山の藩政改革を補佐した。